

# 日本手話研究はラベルを使用するべきではない

松田俊介

キーワード：日本手話 ラベル 多義性 疑似問題 多義性の誤謬 実証性 反証可能性  
認知バイアス

## 要旨

日本手話の論文や学習書では、ラベルという表記法を用いて語を記述するのが一般的である。しかし、このラベルには様々な問題がある。(i) 多義性が隠されてしまうこと、(ii) 対照研究上の疑似問題が設定されてしまうこと、(iii) ラベルが何を表示するものなのか研究者間でコンセンサスが得られていないこと、(iv) 例文の再現ができなくなってしまうこと、である。これらの問題を解決するには、形式（つまり写真や動画）を示し、かつ文中でその形式が担っている意味を記述することが肝要である。

## 1. はじめに<sup>1</sup>

手話とは身体動作を使ってメッセージを伝達する視覚言語である。そのうち、日本のろう者コミュニティで自然発生したものは日本手話と呼ばれる<sup>2</sup>。

日本手話の論文や学習書では、ラベルという表記法を用いて形式と意味の対としての語を記述するのが一般的である。次の (1)~(3) がその例である（本稿では〈〉という記号をラベル表示に用いる。本稿が引用した論文の中には、// という記号を使っているものや、そもそも記号を一切使っていないものなど様々であったが、それらはすべて〈〉に統一している）。

- (1) 〈田中 英語 わかる〉 (松岡 2015: 14)
- (2) 〈とても 暑い〉 (高嶋 2019a: 799)
- (3) 〈田中<sup>TOP</sup> 三角 書く PT<sub>田中</sub>〉 (上田・内堀 2021: 188)

<sup>1</sup> 本稿の執筆にあたっては多くの方々のお世話になった。とりわけ、篠原俊吾先生、西村義樹先生、山泉実先生、浅岡健志朗氏、石塚政行氏、氏家啓吾氏、木下着一朗氏、田中太一氏、萩澤大輝氏には貴重なご意見をいただいた。また、日本手話母語話者の方には写真掲載許可をいただいた。心から感謝申し上げる。なお、本稿に残る不備はすべて筆者一人の責任に帰するものである。本稿は JSPS 科研費 21J21787 の助成を受けたものである。

<sup>2</sup> 日本では、「オリンピックの開会式に手話通訳がついた」といったように、手話という言葉で日本手話を指すことがよくある。この用語法は、実際には日本手話という個別言語を指しているにもかかわらずそのことを意識させないものであるため、多くの人にとって「ろう者は皆「手話」という名前の一つの言語を使っている」という印象を与える。そこから「手話は世界共通である」と思われることも少なくないが、これは間違いである。このような間違いがあってはいけないので、本稿で単に「手話」とのみ言った場合には手話一般を指すことにする。

ラベルは一見グロスと似ているように思えるが実は違う。グロスは語 (や形態素) そのものではなく、もっぱらその意味を表記するものである。また、グロスと語の対応は固定したものではなく、同一の語であっても環境が異なれば異なるグロスに対応しうる。例えば、(4)(a)~(c)にある現代ロシア語の文を見ていただきたい。ここでは、タイプの同一である“v”に異なるグロスが振られている<sup>3</sup>。

- (4) a. poezdka v Astraxan'  
trip to Astrakhan  
'a trip to Astrakhan' (Bailyn 2012: 36)
- b. novyj učebnik Vasil'eva po russkoj istorii v krasivoj obložke  
new textbook Vasiliev-GEN about Russian history in beautiful cover  
'Vasiliev's new textbook of Russian history with a beautiful cover' (ibid.: 38)
- c. Ivan byl tot brat, kotoryj vseгда popadal v bedu  
Ivan was that brother-NOM who always got into trouble  
'Ivan was that brother who always got into trouble' (ibid.: 67)

それに対して、ラベルは語<sup>4</sup>を表記するものであり、例文を示すためにも使われる。すなわち、(1)~(3) は (4)(a)~(c) の各 1 行目に相当するというわけである。また、ラベルにはグロスが持つような柔軟性はない。同一の語タイプに属する各トークンには、その実際の意味の如何にかかわらず、同一のラベルが常に付されることになっている。この理由は、日本手話の書記方法が確立していないからである。日本手話の形式 (つまり身体動作) を紙面上で忠実に再現することは難しい。そこで、日本手話研究においては、ラベルと語を一対一に対応させることで、あるラベルを見たら即座に、かつ正確に語が想起されることが目指されているわけである<sup>5</sup>。

しかし上記の方針は、日本手話の研究および教育の世界でさまざまな問題を生じさせている。本稿ではその問題の内実を明らかにし、その解決法を提案する。

具体的な議論に先立って、押さえておきたいことがある。語は、それがたとえどんなもので

<sup>3</sup> 原文にあった、統語構造を表すブラケットは省略した。強調は引用者による。

<sup>4</sup> ただし、手話言語学において「語」という範疇が明確に定義されているわけではない。多くの先行研究が「語」という用語を用いているため、ここではそれに倣うことにするが、理論的な含意はないことに注意されたい。

<sup>5</sup> 以下の記述が高嶋 (2019a: 800) にある (補足は引用者による)。この記述は、おそらく私がここに書いたことと概ね同趣旨であると思われる。

日本手話の語には日本語のラベルが慣習的につけられている。[...] この記法がこれまでの [日本] 手話研究で慣習的に用いられている。これはなぜかという、手形や位置をすべて記述するのは煩雑であるためか、[日本] 手話には実用的な書き言葉がなく、日本語のラベルを便宜的に用いる方がよいが、意味に対応させた語をいちいち書いていると、同じ手形、位置、動きの手指単語に複数のラベルがついてしまい混乱するからである。

あっても、形式と意味が結びついた記号である。例えば、「桜」という語は、10画からなる文字形式 (外見) と、春に咲くバラ科のあの植物という意味とが結合した記号である。ラベルも同様である。「〈桜〉」というラベルは、「〈 〉」内に「桜」という日本語の文字がある」という形式 (外見) と、「日本手話において桜という意味を表す語」という意味とが結合した記号である (図 1)。

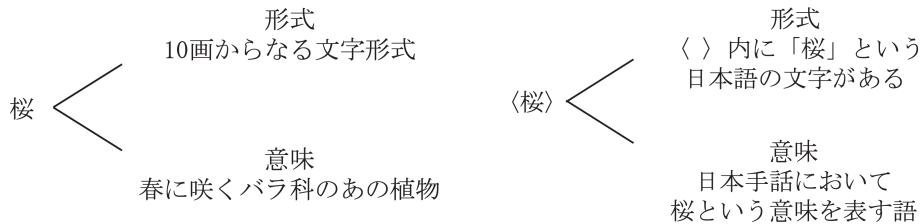


図 1: 形式と意味と記号

本稿の構成は以下の通りである。2 節ではラベルの形式にまつわる問題を、3 節ではラベルの意味をめぐる問題を指摘する。4 節ではその形式と意味が結合した記号としてのラベルに関する問題を検討する。5 節ではこれらの問題の解決策を述べる。

## 2. 「形式」にまつわる問題

この節では、ラベルの形式、すなわちラベルの外見が生む問題を見る。

### 2.1. 多義性が隠されてしまう

日本手話のそれぞれの語は、それぞれ唯一のラベルと対応する。すなわち、〈 〉の中に入る日本語の表現は一つに決まるということである。このような表記法の規約を忘れて、〈 〉の内部に表示されているものを日本手話の語の意味として受け取ってしまうと、ラベルの表す語がただ一つの意味しか持たないような印象を受ける。つまり、その語が持つ多義性が隠されてしまうということである。この状況を戲画的に言えば、“have” がどんな意味で使われていても常に「持っている」と訳すようなものである。これではいつまでたっても“have”を適切に使えるようにならない。これと同じことが、日本手話の研究および教育の世界で起きているのである。

例を見よう。次の (5)(6) は、写真を見れば想像できるように、「ドアを押し開ける」「手で持ったコップで飲む」という意味を表すことができる。それに加えて、「ドアを開ける」「飲む」という意味も表すことができる。



多くの研究者は、(5)(6) にそれぞれ〈ドアを開ける〉〈飲む〉というラベルを付す。つまり、彼らのラベルでは「どうやってそれを行ったのか」という意味の側面が削除されているわけである。この程度の削除は特段騒ぎ立てるほどのことではないと思われるかもしれない。しかし、実はこの「どうやって」の部分は日本手話の運用における重要な位置を占める。例えば、日本語の「外から車のドアを開ける」の下線部に対して (5) を充てることはできない。次の (7) を使うのが普通である。これは、車のドアを外から開ける際には手前に引いて開けるという知識を話者が持っているから、と考えられる。もし仮に日本手話学習者がラベルの規約を忘れて〈ドアを開ける〉というラベルを軽率に受け取ってしまうと、(5) に「ドアを押し開ける」という意味があることが見えなくなる。その結果、いつまで経っても日本手話として自然な表現をすることができないのだ (上で述べた “have” のことを思い出していただきたい)。



また、以下に抜粋した日本昔話「赤ん坊になったお婆さん」<sup>6</sup>にある「飲む」に対して、(6) を充てることは普通ない。次の (8) を使うのが自然である。その理由は、「薪を取りにいくときには普通、水を飲むための容器を携帯しない」「切羽詰まっているときにわざわざ容器を取り出して行儀良く飲みはしない」と話し手が判断するためだ、と考えられる。もし日本手話学習者が〈飲む〉というラベルを…。もはや言うまでもあるまい。

<sup>6</sup> <http://nihon.syoukoukai.com/modules/stories/index.php?lid=80> から引用。サイトは 2022 年 7 月に確認。

[状況説明]

おじいさんは山へ薪を取りに行ったが、道に迷ってしまう。山の中をさまよっていると、小さな泉を見つける。

喉が渴いていたじい様がさっそく一口飲んでみると、じい様はどんどん若返っていきましました。なんとそれは「若返りの泉」だったのです。

(8)



さらに、この「どうやって」の部分からは言語学的に重要な研究テーマが提起される。「ドアを開ける」と「ドアを押し開ける」は上位概念 (類) と下位概念 (種) の関係にある (図 2)。

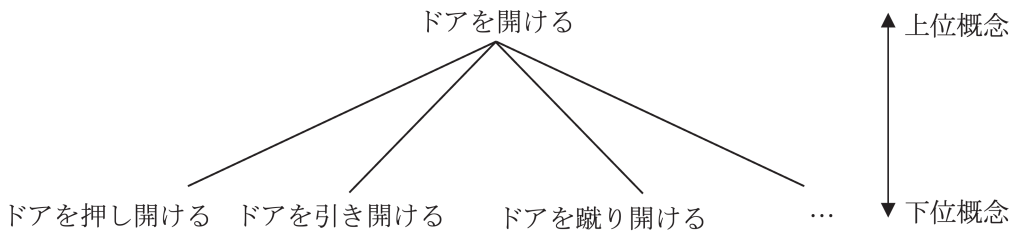


図 2: 上位概念と下位概念の関係

「ドアを押し開ける」という意味を表す形式を用いて「ドアを開ける」という意味を表すというのは、下位概念を表す形式を用いて上位概念を表す「提喩」である (佐藤 1992[1978])。日本手話で (直接使役などの) 身体行為を描写するとき、この種の提喩がごく普通に用いられる。むしろ、「開ける」という意味だけを担う形式が存在しないために提喩で表すより他ない、と言うほうが正確である (松田 2020)。しかし、ラベルを迂闊に捉えたと、(5) の形式が「ドアを開ける」という意味しか表さないという錯覚を覚えてしまう。その結果、上位概念と下位概念に基づく多義の関係が見えなくなり、提喩研究は成立しなくなる。人間の言語知識を解明する営みにおいて非常に大きな示唆を持つこのような研究領域 (田中ほか 2019) が日本手話研究から失われては、健全な研究を行うことが困難になってしまうであろう。そしてこの不健全な体制は当然、日本手話学習者の適切な言語使用を妨げることにもつながる。

## 2.2. 対照研究上の疑似問題を設定してしまう

繰り返しになるが、〈 〉の中には日本語の表現が書き入れられる。その外見ゆえ、対照研究

上の疑似問題が設定されることがよくある。例えば、松岡 (2019a: 66) は (9)(10) の語に対してそれぞれ〈まし〉〈まあまあ〉というラベルを振り、これらを日本語の「まし」「まあまあ」と対照させて以下のように述べる<sup>7</sup>。

(9) 〈まし〉



(10) 〈まあまあ〉



(松岡 2019a: 66)

日本語の「まし」「まあまあ」は、「自分は良いとは思わないが、ないよりは良い」というような、話し手の評価が低いときによく使われる表現です。[...] それに対して、[日本] 手話表現の〈まし〉と〈まあまあ〉は、日本語の表現とは違ってそれぞれ「かなり良い」「割と良い」という、ほめ言葉に近い表現です。[...] 単語の直訳にこだわりすぎず、ニュアンスの違いに気をつけて覚えましょう。

(松岡 2019a: 66; 強調・補足は引用者による)

今この記述の細部には立ち入らない<sup>8</sup>。私がここで言いたいことは、仮に (9)(10) に付されるラベルが〈かなり良い〉〈割と良い〉であったら、松岡 (2019a) はこのような対照は行わなかったのではないだろうか、ということである。あるいは、(9)(10) に貼られるラベルが〈語番号 236〉〈語番号 471〉であったら、松岡 (2019a) はこのような対照は行わなかったのではないだろうか。要するに、(9)(10) は本来「かなり良い」「割と良い」という意味であるにもかかわらず、〈まし〉〈まあまあ〉というラベルの外見から日本語の「まし」「まあまあ」に対応する意味を持っていると誤解してしまったがために、上にあげた対照を行おうと思ってしまったのではないのか、ということだ<sup>9,10</sup>。

<sup>7</sup> 松岡 (2019a: 66) によると、(9)(10) の違いは、前者が「手首を左に1回ひねる」のに対して、後者が「左に手首を数回ひねる」る、である。

<sup>8</sup> 例えば、日本語の「まし」「まあまあ」、日本手話の〈まし〉〈まあまあ〉の意味記述はこれでよいのか。「ラベルは日本語訳ではありません」(松岡 2019a: 6) という記述が文字通りの意味を持つなら引用中の「単語の直訳」は何を指すのか。「単語の直訳」とラベルの関係はいかなるものか——このように問題点は様々あるが、ここではこれら諸問題には目を瞑り、松岡の記述が仮に正しいとしてもなお問題があるということを論ずる。

<sup>9</sup> このような対照研究は学習者の誤解を防ぐことを意図して提示されたものでもあろう (松岡 2021: 104-106 も参照)。しかし、その中でラベルを使用してしまっているために、かえって混乱を生み出すことになっているように思われる。

<sup>10</sup> 松岡 (2019a) は、別の箇所では〈まし (かなり良い)〉〈まあまあ (割と良い)〉というラベルを採用している。〈まし〉と〈まし (かなり良い)〉がどのように使い分けられているのかは判然としない。また、松岡 (2019a: 6) には「ラベルは日本語訳ではありません」と書いてある。なぜ松岡 (2019a) が (9)(10) の日本語訳である「かなり良い」「割と良い」を〈〉の中に書き入れ、ラベルとして提示したのかもはっきりとしない。



ちなみに、松岡 (2015: 14) はラベルの外見について次のように述べている。

日本語の単語と意味を混同されることを防ぐため、また海外の研究者が理解しやすいように、日本手話の単語のラベルを英語で書く場合もあります。

この記述は、本稿の議論に即して言えば (おそらく)、「ラベルをあえて英語で書くことがありますが、その理由は〈まし〉と書くとその外見から日本語の「まし」と同じ意味だと思ってしまっているからです」という趣旨だと思われる。つまり、松岡 (2015: 14) はラベルの外見に引っ張られないよう注意喚起をしているのである<sup>11</sup>。松岡 (2019a) は自身が注意を促した当の問題に嵌ってしまっていると言えよう<sup>12</sup> (同種の疑似問題は、松岡 (2015) や松岡 (2019b) にも見られる)。

### 3. 「意味」にまつわる問題

2 節で述べたのはラベルの形式——ラベルの外見——が生む問題であった。この節では、その形式が担う意味——ラベルが表示するもの——にまつわる問題を取り扱う。

本稿で挙げる多くの論者が言うように、ラベルの意味とは「日本手話の語 (形式と意味の対)」である。しかし実を言うと、研究者の中にはそのような意味でラベルを使わない人もいる。つまり、そもそもラベルが何を表示するものなのかということに関して研究者間で合意が得られていないということだ。以下では、ラベルの意味を3つ見る。

#### (イ) 「ラベルの意味＝日本手話の語」という立場

この立場は、ラベルの意味についての一般的な (と思われる) ものであり<sup>13</sup>、私たちがここまで見たきたものである。例えば、松岡 (2015, 2019a) はこの立場に立つ。松岡 (2015: 14) は、「この本で [日本] 手話単語の例を出す際には〈 〉が使われています」と述べる (補足は引用者による)。ここにおける「単語」という用語が形式と意味の対を表しているのが問題になるわ

<sup>11</sup> しかし、〈UNDERSTAND〉のように〈 〉の中に英語の表現を書き入れたら、今度は英語がわかる人 (日本手話研究者の多くも含まれる) が混同することになる。

<sup>12</sup> ただし、松岡 (2019a) の記述が全く見当外れなわけではない。私なりに一部記述を加えると次のようになる。

(9)(10) はしばしば「まし (mai)」「まあま (mama)」に相当する口の形を伴いながら表現される。それゆえ、日本語の「まし」「まあま」と完全に対応すると思われるかもしれないが、実はそうではない。(後略)

ラベルの外見ではなく口の形に基づくのであれば、適切な対照研究を立ち上げることができると思われる。そもそも、共通点・類似点がないのであれば対照する意義はない (事実、日本語の「犬」と英語の “if only because” を対照する意義は十中八九ない)。日本語と日本手話の対照研究をする際には、相違点だけでなく共通点も記述するべきであろう。

<sup>13</sup> 以下で述べるように、上田・内堀 (2021) はラベルを語表示に用いている。その上田・内堀 (2021: 186) が「ここでは、[日本手話] の表記としていわゆるラベル表記を用いる」(強調・補足は引用者による) と記述していることから、ラベルのこのような用法が一般的と思われるかと判断できるだろう。ただ、ラベルの用法は論者によって異なるため、現状では自身がどのような意味でラベルを用いているのかを明示する必要がある。

けだが、松岡 (2015) の「単語」は二重分節性<sup>14</sup>の第一分節における単位——つまり意味を担う単位——を指して用いられている (松岡 2015: 17–18) ので、明らかに形式と意味の対を表すものである。

この立場はほかにも高嶋 (2019a) が採用している。注 5 でも見たように、高嶋 (2019a: 800) は「日本手話の語には日本語のラベルが慣習的につけられている」と述べている。問題は、高嶋 (2019a) における「語」という用語が形式と意味の対を表すものとして使われているかどうかだが、高嶋 (2019a: 805) には「類像的な語」という記述がある。類像性とは形式と意味の間に成立する性質のことであるから、ここにおける「語」という用語は形式と意味を備えるものとして使われていると考えられる。また、高嶋 (2019a: 803) は「同じイメージと調音から作られる語」とも言っている。この「イメージ」は「意味極 [...] についてくる」(高嶋 2019a: 804) ものとされているから、イメージは意味の一部とみなされる。したがって、高嶋 (2019a) はやはり「語」という用語を形式と意味の対を表すものとして用いている<sup>15</sup>。

上田・内堀 (2021) もこの立場に立つ。上田・内堀 (2021: 186) は日本手話の「動詞句構造を検討する」と述べ、句構造 (11) を提示している。句とはいくつかの語が結合して文の単位になったもの (渡辺 2009, 西村 2015) であるから、上田・内堀 (2021) はラベルを語表示に用いていることになる。当然、この「語」の内実が問題になるわけであるが、ここで手がかりになるのが上田・内堀が生成文法の専門家であるという点である。生成文法の言う語には音韻・統語・意味の情報が込められている (原口ほか (編) 2016: 278, 大津 2022: 188) ので、上田・内堀 (2021) も語をそのように捉えていると思われる<sup>16</sup>。

- (11) 〈田中<sup>TOP</sup> [TP/v\*P 時々[v\*P 速く[v\*P 三角[v\*P 丁寧[v\*P t 田中[RP t 三角 [RP t 三角 書く R]]]v\*[-RS]]]]]]PT 田中〉  
(上田・内堀 2021: 190)

(ロ)「ラベルの意味＝日本手話の語の意味」という立場

他方で、本来は語を表示するはずだったラベルが、その元々の機能を失い、意味だけを表すようになっている場合もある。例えば、(イ) で取り上げた松岡 (2015) である。松岡 (2015: 66) は (12)(13) に対して、同じ〈食べる〉というラベルを貼っている。松岡 (2015) はもともと (イ) の立場に立つことを宣言しているから、このラベル貼付法を見た読者は (12)(13) を同じ語として読むことになる。しかし、(12)(13) はそもそも形式が異なるのだから普通同じ語とは言わな

<sup>14</sup> 松岡 (2015: 17) は二重分節性を「小さなものが集まり、大きな固まりを作る性質」と定義している。この定義には、核心となる「二重性」が捉えられないという問題がある。

<sup>15</sup> ここではこのように簡単に述べたが、実は高嶋 (2019a) における「イメージ」という用語の内実は判然としない。

<sup>16</sup> 上田・内堀 (2021) が松岡 (2015) を引いていることも、彼女らが (イ) の立場に立っていることの証拠になる。松岡 (2015: 54) は句を「語と語が集まって固まり (構成素) を作」ったものと定義し、かつ「語」という用語を「単語」と同じ意味で使用している。この松岡 (2015) を参考文献として挙げているので、上田・内堀もこの定義を継承していると考えられる。



い<sup>17</sup>。したがって、ここで整合的な読みをするためには、ここにおけるラベルには形式が込められていない——ラベルは語の意味のみを表す——と考えるのが妥当だということになる。つまり、松岡 (2015) は同じ本の中で、あるときには (イ) の立場に立ち、別のときには (ロ) の立場に立っていると解釈できるというわけである<sup>18</sup>。

(12) 〈食べる〉



(13) 〈食べる〉



(松岡 2015: 66)

(ハ) 「ラベルの意味＝日本手話の語の形式」という立場

最後に、ラベルが日本手話の語の形式のみを表しているとする立場を見よう。(イ) で見た高嶋 (2019a) である。高嶋 (2019a: 800) は〈得意〉というラベルを取り上げ、次のように述べる。

「得意／自信がある」を意味するだけでなく、口型が「po」に変われば「どうして？」という意味になったりする。このようにかなり異なる意味になっても、手指動作につけられたラベルは〈得意〉のままである<sup>19</sup>。 (強調は引用者による)

高嶋 (2019a) はもともと (イ) の立場に立っているから、このラベル貼付法を見た読者は「得意／自信がある」という意味を表す語と「どうして？」という意味を表す語を同じ語として読むことになる。しかし、これらはそもそも「かなり異なる意味」を持つ語 (同音異義語なのかもしれない) なのだから普通同じ語とは言わない。したがって、ここで整合的な読みをするためには、ここにおけるラベルには意味が込められていない——ラベルは語の形式のみを表す——と考えるのが妥当だということになる。つまり、高嶋 (2019a) は同じ論文の中で、あるときには (イ) の立場に立ち、別のときには (ハ) の立場に立っていると解釈できるというわけである。

<sup>17</sup> (12)(13) の形式に共通部分があるとして、それに対して同じ〈食べる〉というラベルを与えている可能性もあるが、注 18 で見る〈寝る 1〉〈寝る 2〉の例を踏まえると、そのようにみなしているとは考えづらい。

<sup>18</sup> 松岡 (2015: 76) は〈寝る 1〉〈寝る 2〉のように類義語には番号を振っている。これと同様に、(12)(13) にも本来は〈食べる 1〉〈食べる 2〉というラベルが付与されるはずであったのかもしれない。もしそうだとすれば、松岡 (2015) は異なる形式を持つ語に異なるラベルを貼ったと言えるため、あくまで (イ) の立場を守っているということになる。しかし、そうすると今度は類義語に対するラベルの貼り方が首尾一貫していないという別の問題が提起される。

<sup>19</sup> 高嶋 (2019a) は〈〉を意味表示に用いていたが、本稿では〈〉はラベル表示であるため、この引用にある〈〉はすべて「」に修正した。

ここで、次のような可能性を想定できる。すなわち、「得意／自信がある」「どうして？」はかなり異なっているがそれでも何らかの共通点があり、その共通の意味に対して同じ〈得意〉というラベルが貼られている、という可能性である。たしかにこの可能性は（〈〉の中になぜ「得意」という日本語を入れたままにしたのか問われることにはなるが）なきにしもあらずだ。だが、高嶋（2019a）が（ハ）の立場に立っていることを支持する別の証拠がある。それは、上の引用で高嶋（2019a）が「語につけられたラベル」ではなくあえて「手指動作につけられたラベル」と書いていることである。次の記述を見よう。

手話言語学では、音声言語学から用語を借用し、「調音」(articulation) や「音韻論」(Phonology) についての研究がある。音声言語学での「音声」という部分を抽象化して考えた場合の「調音」は言語記号としての体系を持った表象の出し方であり、「音韻」はその離散的な体系のことになる。

音声言語の調音は喉と舌の動かし方によるが、これに対応する手話の調音は、手指動作だけにとどまらず、目や口の動きまでが言語要素となる。（高嶋 2019a: 799）

今この記述の細部には立ち入らない。ここで押さえておくべきことは、高嶋（2019a）における「手指動作」が音声学の「調音」そして音声言語の「喉と舌の動かし方」に対応する、という点である。つまり、「手指動作」はもっぱら形式を指す用語なわけだ。そのため、先の引用にあるラベルはやはり形式のみを表していると言える（(イ) と (ハ) の間での揺れは高嶋（2019b）にも見られる）。

このように、ラベルの意味——ラベルが表示するもの——は少なくとも3つある。さらに面倒なことに、同じ研究者であっても時と場所が変わればラベルの意味も変わるのである。ラベルの意味を個人の中で変化させている者はほかにもいる。例えば、米内山（2011: 5）にはラベルは「単語の意味を表す記号としての仮の日本語です」と書かれているに対して、その一年後の米内山（2012: 4）では特に但し書きもなくラベルは「単語の形を表す記号としての仮の日本語です」に変わっている<sup>20</sup>。

#### 4. 「記号」にまつわる問題

2 節で述べたのはラベルの形式にまつわる問題であり、続く 3 節で述べたのはラベルの意味をめぐる問題であった。この節では、その形式と意味が結合した記号としてのラベルに関する問題を検討する。

日本手話研究においては、少なくともごく基本的な語については、ラベル付けに関する慣習

<sup>20</sup> 米内山（2011）と書いたが、この本は「米内山が執筆したもの」ではなく「米内山が監修したもの」である。よって、米内山本人がこの記述を行ったと言うことはできない（そもそも誰がこの記述をしたのかはこの本を読んでわからない）が、米内山が監修者であることは紛れもない事実であるため、ここでこのように批判することには一定の正当性がある。

(暗黙の合意) が成立している。つまり、その慣習を知っている者であれば、〈○○〉というラベルの形式——ラベルの外見——を見たら即座にこのラベルが何を意味しているのか——このラベルが日本手話のどの語を表しているのか——わかるわけだ。しかし、全ての語に対してそうした慣習が成立しているわけではない。というのも、ラベルと語を一対一に対応させた表、すなわち「ラベルリスト」なるものがこの世に存在するわけではないからだ。現在の日本手話研究は、「このラベルをつけると専門家であれば語を同定できるはずだ」という個人の思いのもとで進められているのである。そのため、非専門家はもちろん、たとえ専門家であったとしてもラベルがどの語を表しているのか推測できず、その結果ラベルで書かれた例文が再現できないということが当然あるのだ。例えば、高嶋ほか (2018: 226–227) は次の (14)(15) のようにラベルのみで例文を表記しているが、高嶋ほか (2018) の意図するところを私は汲み取ることができなかったのも、これらを完全に再現することは私には難しい。

(14) 〈PT3 ろう 家 ドア-開く-閉まる<sup>++パタパタ</sup> 音 足<sup>++パタパタ</sup> //PT3 ろう いう PT3〉

(15) 〈コアラ 赤ん坊 産まれる 成長する 方法 何 産まれる ポケット 入る 成長する PT3 いう〉

(高嶋ほか 2018: 226–227)

例えば、(14) にある〈ドア〉が次の (16) のどれなのか私には見当がつかなかった。

(16) a



(片手を一方の手に数回打ちつける)

b



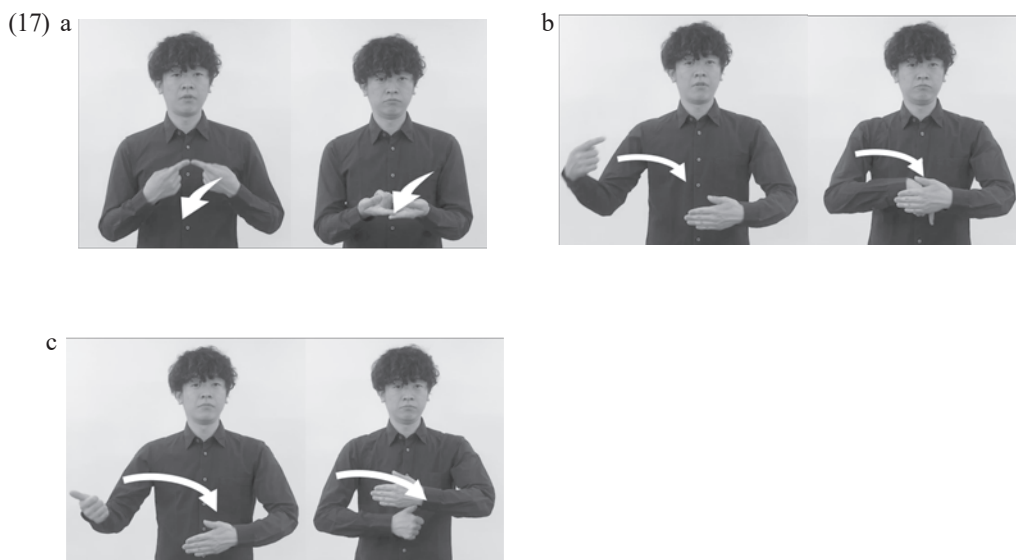
(片方の手を数回前後にパタパタ動かす)

c



(片方の手を数回前後に動かす)

他にも、(15) の〈入る〉が次の (17) のどれなのか私には判断できなかった。

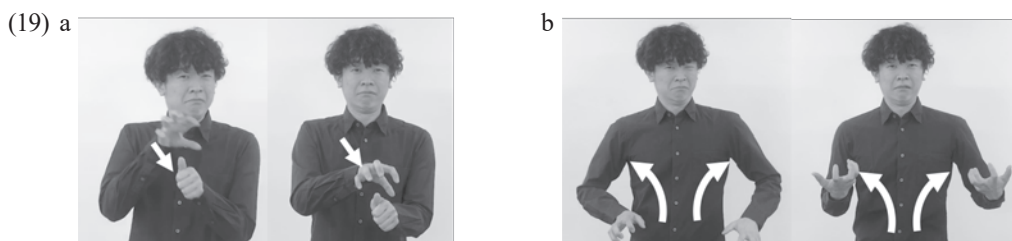


もう一つ例をあげよう。赤堀・岡・松岡 (2012) である。

(18) 〈これ 誰 大工 建てる 家 中 育つ 野菜 食べる 犬 怒る 女; PT4<sub>i</sub>〉

(赤堀・岡・松岡 2012: 124)

(18) にある〈怒る〉が次の (19) のどれなのか私は推測できなかった。文頭の〈これ〉も私にはわからなかった。指差し (pointing) のことを表しているのかとも考えたが、そうだとしたらこの例文にもあるように〈PT〉と書くはずである。さらに言えば、仮に全てのラベルがどの語を表しているのかわかったとしても、(18) を完全に再現することは私には難しい。なぜなら、(18) には顔の動きや体の向きなどの情報——非手指動作の情報——が書かれていないからだ。



日本手話の運用能力が高ければ、ラベルの表すものがある程度わかるだろう。とはいえ、それが推測であることに変わりはない。議論の骨子となる例文の解釈が推測のみに依拠している

というのは、学術的に大いに問題があると思われる。例文の再現ができないということは、実証性・反証可能性が確保されていないということであるから、ラベルを用いて表記されたデータおよびそれに基づいて展開される議論は、記述研究および理論研究の発展に寄与し難いということである。さらに言えば、日本手話の言語学的研究の歴史は浅く、議論だけでなくデータの記録それ自体も非常に意義のある作業である (松岡 2015: 11–13, 高嶋 2020: 145) ので、その意味でも推測は可能な限り排除されるべきである<sup>21</sup>。

## 5. 解決策とそれに伴う問題点

以上、ラベルが孕んでいる深刻な問題を指摘した。実を言うと、私もラベルを使用してしまったことがある (松田 2019)。その反省の意味も込めて、以下ではこの問題の解決策を述べる。

すぐ思いつく解決策は、「ラベルリスト」を作ることであろう。しかし、それで万事解決かと言うと、そうではない。そもそもラベルリストを作るということは、日本手話の全ての語に前もってラベルを与えておくということである。そんなことが可能なのだろうか。日本手話研究と並行して、ラベルリストを少しずつ作成すればよいではないか——よし、ではそのような体制で作成していくことにしよう。早速取り掛かろうとしたとき、すぐさま別の問題が浮上してくる。まず、多義語のラベルを決めるときには、〈 〉の中に何を入れるのだろうか。中心義を入れればよいではないか——いや、中心義という概念自体困難な問題を抱えている (平沢 2019)。多義語か同音異義語か決め難い語は、同じラベルにするのかそれとも違うラベルにするのか<sup>22</sup>。「ラベルリスト作成会議」にはどのような研究者・母語話者が参加するのか。新しい語が出てくるたびに、この会議を開催するのか。開催したはいいが、議論が紛糾したときにはどうするのか…。奇跡的に、これらの問題を全て克服して、なんとかラベルリストを完成させたとしよう。これですべてうまくいくだろうか。いや、ラベルリストを使うときには2~4節で述べた問題に嵌まらぬようにせねばならない。それも、今後一生、である。そんなことが可能なのだろうか…。<sup>23</sup>。このように、ラベルリストは問題を解決するどころか、新たな問題を大量に引き連れてくる。これではキリがない<sup>24</sup>。

<sup>21</sup> もちろん、どこまでの情報を記述する必要があるかは、記述者の理論的立場に大きく依存する。とは言え、(17a)(17b) や (19a)(19b) の場合のように明らかに別語であるものまで一つのラベルにまとめてしまうことはやはり問題であろう。

<sup>22</sup> 多義と同音異義は相互排他的なものではなく連続体をなしている。詳しくは Tuggy (1993) を参照。

<sup>23</sup> 2~4節で述べた問題には複数の認知バイアスが関与していると考えられる (cf. Stroop 1935, サンスティーン 2003, Ross et al. 1977)。詳細については、日本手話研究のみならず言語研究一般との関連も含めて述べなければならないので別稿に譲ることにして、とにかく、私たち人間は認知バイアスからは逃れられないため、本稿で述べた問題に陥らないようにするのは相当困難だと思われる。

<sup>24</sup> Stokoe が作った表記法 (Stokoe et al. 1965) を採用するのはどうかという意見もあるだろう。しかし、この表記法はルールが複雑なうえに様々な問題点があるので実用的ではない。ラベルの表すものがわからなければその都度著者に聞けばいいのではないかと、という考えもあるかもしれない。たしかに、著者が生きている間は聞くことができる。「(14) の〈ドア〉ってなんですか。——それはこういう語です」「(14) の++バタバタでなんですか。——それはこれです」という問答は著者が生きているかぎり可能だ。しかし、著者が亡くなった後は質問することはできなくなる。また、日本手話の論文ならまだしも、世界中の手話の論文を読むときにそのような問答を毎回行うことは不可能だ。したがって、著者に尋ねるというのは問題の根本的な解決策にはなり得ない。



もう予想がつくと思うが、私が現状最も良いと考える解決策は、そもそもラベルを使わないことである。そして、形式（つまり写真や動画）を示しかつ、文中でその形式が担っている意味を記述する——要するに音声言語の記述と同じ方策を取る——のである<sup>25</sup>。こうすれば、上で述べた問題は少なくともある程度は解消できると思われる。現在の私はこの方法で論文を書いている（松田 2020, 2021, to appear）。その一部を以下に載せる。図中の写真に付した日本語はラベルではなく日本語訳である。

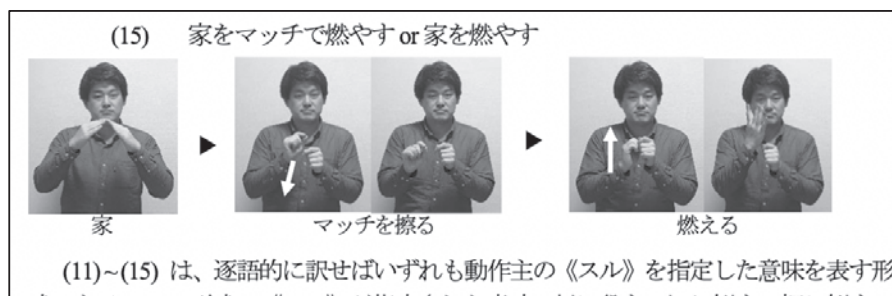


図 4: 松田 (2020) の一部

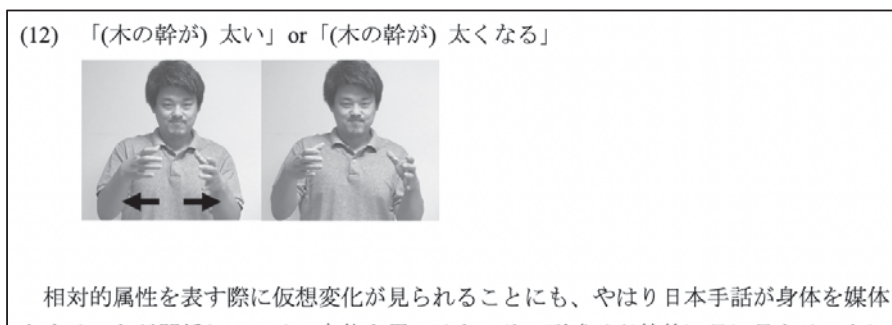


図 5: 松田 (2021) の一部

ただこの解決策も、実行するにあたって全く問題がないわけではない。まずはプライバシーの問題がある。写真には当然日本手話話者の顔が写るから、個人が特定できる情報が公になってしまう<sup>26</sup>。次に、学会発表や論文執筆における紙幅の問題もある。例えば、言語学関連の学術団体のうち最も大きいものの一つである日本言語学会を見てみると、2022 年現在で口頭発表要旨（応募用）のページ数は A4 で 2 ページ、口頭発表予稿集のページ数は A4 で 7 ページである。この紙幅に写真を入れると、書ける文字数はかなりの程度制限される<sup>27</sup>。

1 つ目の問題は、研究者が事前にインフォーマントと丁寧な打ち合わせをし、写真掲載の許

<sup>25</sup> 写真のみならず QR コードなどを使うということも考えられるだろう。

<sup>26</sup> 顔にモザイクをかければよいではないかと思われるかもしれないが、日本手話（および手話）では顔の動きも重要な意味を担う。実際、手指動作が同じでも、顔の動きが違えば、意味が異なることはよくある。したがって、例文を正確に記述するという意図のもとで写真を載せる以上は、顔を隠すことはできない。

<sup>27</sup> 山泉 (2019: 64) も参照。



可をとることで解決可能である。より困難を伴うのは2つ目の問題である。これは研究者個人のみならず、言語学界全体が関与して初めて解決できるものである。この世界には音声言語以外の言語も存在すること、そしてその言語の研究をするにあたって現行の制度の一部が障壁となっていることを私たち言語学者が認識し、その認識に沿った制度の整備を進めてゆかねばならないだろう。こうした変革を経た暁には、日本手話研究の未来が明るくなると私は確信している<sup>28</sup>。

## 略号一覧

GEN: 属格、NOM: 主格

## 参考文献

- 赤堀仁美・岡典栄・松岡和美 (2012)「文法が示す自然言語としての日本手話」佐々木倫子 (編)『ろう者から見た「多文化共生」：もうひとつの言語的マイノリティ』118-140. ココ出版.
- 上田由紀子・内堀朝子 (2021)「日本手話におけるいわゆる動詞句削除現象：SASS による CL 動詞に注目して」日本言語学会第 162 回大会予稿集.
- 大津由紀雄 (2022)「言語の運用」大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則 (監修)『言語研究の世界：生成文法からのアプローチ』187-201: 研究社.
- サンスティーン, キャス (2003)『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社.
- 佐藤信夫 (1992 [1978])『レトリック感覚』講談社.
- 高嶋由布子・黒田栄光・シャーマン ウィルコックス (2018)「日本手話の「いう」の拡張：証拠性と習慣性・一般性への経路」日本言語学会 156 回大会予稿集.
- 高嶋由布子 (2019a)「手話と認知言語学」辻幸夫 (編)『認知言語学大事典』796-809. 朝倉書店.
- 高嶋由布子 (2019b)「日本手話の動詞・形容詞：何をどう記述するか」国立国語研究所共同プロジェクト日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成研究発表会.
- 高嶋由布子 (2020)「危機言語としての日本手話」『国立国語研究所論集』18: 121-148.
- 田中太一・佐藤らな・松田俊介・浅岡健志朗・西村義樹・山泉実 (2019)「シネクドキの世界：カテゴリー化の言語学」日本言語学会 162 回大会ワークショップ.
- 西村義樹 (2015)「句」斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編)(2015)『明解言語学辞典』50.三省堂.
- 原口庄輔・中村捷・金子義明 (編)(2016)『チョムスキー理論辞典』研究社.
- 平沢慎也 (2019)『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から

<sup>28</sup> 本稿の提案は、現在進行中の日本手話コーパス (のみならず世界中の手話のコーパス) の作成を一旦停止させてしまうものと思われる。というのも、現状コーパス構築に挑んでいる多くの研究者が、ラベルと語 (もしくは意味、もしくは形式) を一対一に対応させて検索できるようにするという方略を採用しているからである。したがって、ラベルの使用を中止するという提案をするからには、日本手話コーパス作成法の代替案を示す責任が私にはあるわけだが、これについてはあまりにも言うべきことが多すぎるので、別稿に譲る (例えば、注 4 で述べた語とは何かという問題、語の同一性をどう認定するのかという問題、言語とジェスチャーの関係をどう捉えるのかという問題、日本手話における品詞をどう規定するのかという問題、現在のテクノロジーでどの程度のことが可能なのかという問題を検討せねばならない)。

多使用論へ』くろしお出版.

松岡和美 (2015)『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版.

松岡和美 (2019a)『みんなの手話 4～6 月・10～12 月』NHK 出版.

松岡和美 (2019b)「13 手話言語」窪菌晴夫 (編)『よくわかる言語学』202-219. ミネルヴァ書店.

松岡和美 (2021)『わくわく! 納得! 手話トーク』くろしお出版.

松田俊介 (2019)「日本手話の動詞連続構文と結果表現」『東京大学言語学論集』41: 205-214.

松田俊介 (2020)「行為のシネクドキ: 認知文法からみた日本手話の使役」『日本エドワード・サピア協会研究年報』34: 55-66.

松田俊介 (2021)「身体を使って話すとは: 認知文法と手話言語学の架橋」『日本エドワード・サピア協会研究年報』35: 43-54.

松田俊介 (to appear)「日本手話における「変化で属性を表す」メトニミー」『京都大学言語学研究』.

山泉実 (2019)「言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス」『日本語・日本文化研究』29: 44-72.

米内山明宏 (監修) (2011)『ユーキャンのこれだけ! 実用手話辞典 2 訂版』ユーキャン自由国民社.

米内山明宏 (2012)『すぐに使える手話パーフェクト辞典』ナツメ社.

渡辺明 (2009)『生成文法』東京大学出版会.

Bailyn, John Frederick (2012) *The Syntax of Russian*. Cambridge: Cambridge University Press

Ross, Lee, David Greene, & Pamela House (1977) The “false consensus effect”: An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental Social Psychology* 13: 279-301.

Stokoe, William C, Dorothy C. Casterline, and Carl G. Croneberg (1965) *A dictionary of American sign languages on linguistic principles*. Silver Spring, MD: Linstok Press. Repr. 1976.

Stroop, J. R. (1935) Studies of interference in serial verbal reaction. *Journal of Experimental Psychology*. 18: 643-662.

Tuggy, David (1993) Ambiguity, polysemy, and vagueness. *Cognitive Linguistics* 4: 273-290.

# Labels Should not be Used in Japanese Sign Language Studies

MATSUDA Shunsuke

**Keywords:** Japanese Sign Language, label, polysemy, pseudo problem, equivocation, verifiability  
falsifiability, cognitive bias

## Abstract

It is common practice in articles and study books on Japanese Sign Language to use what are known as labels, each of which is intended to uniquely identify a word in this language. However, labels have the following problems: (i) they may lead unwary readers to mistakenly believe that a polysemous word has a single meaning, (ii) they may prompt researchers to raise pseudo problems in contrastive studies, (iii) there is no consensus among researchers as to what labels are meant to represent, and (iv) they are often inadequate to help readers reconstruct the expressions they supposedly represent. To solve these problems, I propose (1) that forms should be represented by using photos or movies instead of labels and (2) that the meaning of each of the forms represented in this way should be described in the text.

(まつだ・しゅんすけ 東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員)